



Intergenomics

第 61 回

インターゲノミクス セミナー

神戸大学大学院・農学研究科
インターゲノミクス研究会 主催
(若手研究者育成支援経費)

日時：6月21日（金）15時10分より 場所：農学部 B101

「ウイルスと生きる」

15:10 はじめに

15:20 ウイルスと生きる

松浦 善治 先生

(大阪大学感染症総合教育研究拠点/大阪大学微生物病研究所 特任教授)

要旨内容：今から約7万年前に人類がアフリカから移動し、家畜の病気であった天然痘や麻疹がヒトに感染する様になりました。その後、大航海時代に麻疹や天然痘が新大陸に持ち込まれて多くの先住民の命が奪われ、梅毒が旧大陸へ持ち帰られました。そして、ジェンナー、コッホ、パスツール達の努力によって、多くの感染症が制圧されました。この様に人類の歴史は感染症との戦いであり、致死性の高いウイルス感染症が幾度となく出現しました。日本でも奈良時代に天然痘により200万人もの犠牲者をだし、当時の日本の人口の4分の1が失われました。

一方、科学の進展によってワクチンや薬剤が開発されて、20世紀中には地球上から感染症を根絶できると誰もが信じていました。しかしながら我々は、エイズ、インフルエンザ、SARS、MERS等の発生を経験し、2019年の暮れに中国武漢で発生した新型コロナウイルスのパンデミックは猖獗を極め、人類がいかにウイルス感染症に対して無力であるかを思い知らされました。ヒトの感染症の60%は人獣共通感染症であり、新興感染症の75%は人獣共通感染症です。さらに、将来パンデミックを起こす可能性の高い病原体の殆どはRNAウイルスであり、RNAウイルスは変異ウイルスの集団として存在することで、宿主の免疫応答や薬剤等の環境変化に柔軟に対応しており、変異ウイルスの出現予測は困難です。

ウイルスは細菌と違って、生きている細胞でしか増殖できず、核酸とそれを包む蛋白質や脂質の単純な粒子で、生き物には必ずウイルスが潜んでいます。また、ウイルスは細胞を熟知しており、ウイルスは細胞の言葉を話すと表現する研究者もいます。自分の設計図だけを小さな殻に詰め込んで、細胞間を渡り歩きながら命を繋いでいるウイルスは、健気で逞しい生命体です。本講演では、そのようなウイルスを概説したいと思います。

業績はこちら



—略歴—

北海道大学獣医学部大学院修了(獣医学博士)。第一製薬中央研究所研究員、

オックスフォード大学 NERC ウイルス研究所ポスドク、国立感染症研究所ウイルス第二部

肝炎ウイルス室長を経て、2000年より大阪大学微生物病研究所教授。2015年-2019年同所長。

2021-2024年大阪大学感染症総合研究拠点 拠点長。

2013年 野口英世記念医学賞受賞

16:50~ 総合討論

世話人：松尾 栄子

お問い合わせ 足助 聡一郎 (農学研究科 生命機能化学専攻 植物病理学分野)

TEL: 078-803-5877 E-mail: soichiro.asuke@port.kobe-u.ac.jp